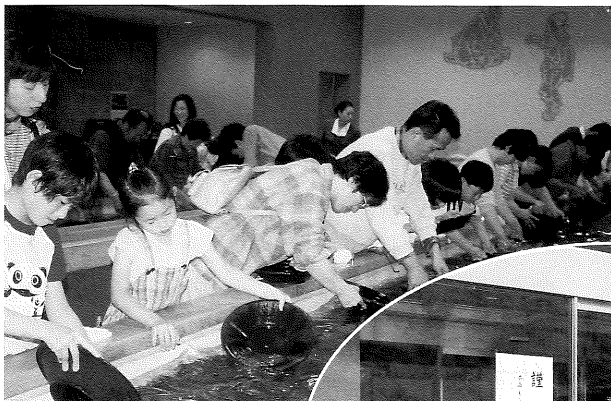


資料館だより

国指定史跡・甲斐金山遺跡 / 湯之奥・中山金山

甲斐黄金村・湯之奥金山資料館報



砂金採り体験室



遺跡見学会 (11. 8. 8)



第1回企画展 (11. 1. 21)



公開講座 (11. 10. 23)

新年明けましておめでとうございます

それぞれの家庭でつつがなく、健康で幸せに満ちあふれた、輝かしい平成12年の新春をお迎えのこととお喜び申し上げます。

当館も、あと3箇月ほどで開館満3年を迎えます。

これまでお寄せいただきました御指導・御協力に対し厚くお礼申し上げます。

平成11年は、3回の企画展開催、NHKテレビへの出演、遺跡見学会の開催、学芸員実習生受入れ、公開講座の開催、館だよりの発行などの事業に携わ

り、2000年問題の声を聞きながら慌しく過ぎ去ってしまいました。

この間、4月には4万人目のお客様、10月には5万人目のお客様をお迎えすることができました。

今後も館の使命を忘れず、登録博物館としての機能が十分発揮されるよう、最善の努力を傾注する所存ですので、これからも変わらぬ御指導・御協力がいただけますようお願いいたします。

湯之奥金山資料館の役割

甲斐黄金村・湯之奥金山資料館 館長 谷 口 一 夫

今、県内はもとより全国的にも新しい文化財の発見がありテレビや新聞を賑わせています。

県内では、昭和40年代から考古学による発掘調査が活発化（多くは開発に伴う事前調査）し、数々の新しい発見が郷土山梨の歴史を塗り替えてきました。

その一つ湯之奥金山（中山金山）の総合調査は、平成元年から平成3年にわたり純粋な学術調査として行われ、その成果は西暦1500年代・16世紀戦国時代、それまでの砂金採取に代わる日本における初源的な山金採掘の金山の姿として捉えられました。

国としても、極めて重要な金山であることから、『国指定史跡』として保存活用されるに至りました。

その湯之奥／中山金山の全貌は、湯之奥金山資料館において当時の時代背景を映像シアターで紹介、さらには、当時の先端技術者「金山衆」の1日の生活を復元したジオラマ展示室（映像と連動）、それに湯之奥金山を取り巻く情報、発掘によって得られた資料、当時の砂金技術を知る数々の資料が分かりやすく展示され、かつ、比重選鉱による当時の採金技術を学ぶことができる体験学習コーナーが設けられ、16世紀にタイムスリップしたかのように採金を体感できる場として公開されています。



館内展示の一部

国指定史跡になっている金山遺跡は全国でも数少なく、宮城県の黄金山産金遺跡（昭和42年指定）、新潟県の佐渡金山遺跡（平成6年指定）、それに本

町の湯之奥／中山金山と塩山市の黒川金山を合わせて指定した甲斐金山遺跡（平成9年指定）の3遺跡、銀山遺跡は島根県の石見銀山遺跡（昭和44年指定）の1遺跡で、金銀山合わせても4遺跡という貴重な歴史遺産です。

本町には、中山・内山・茅小屋の湯之奥3金山のほかに、常葉・栃代・川尻の3金山をもち、合わせて6金山遺跡をもつ全国屈指の金山町として全国関係者の注目を集めているところです。

特に総合学術調査に基づく金山資料館の存在は我が国唯一のもので、金山研究の拠点的な役割をもち、全国の研究者の高い関心と、現実に館への来訪が少なくない状況にあります。

日本の博物館は文部省の生涯学習局が担当し、効果的な館運営ができるための様々な行政指導がされていますが、博物館は館種に応じた「特色ある」博物館（資料館）として、資料の収集、保存、展示、研究活動、教育普及活動等の充実を図りながら、利用者「親しまれる」「開かれた」博物館（資料館）として一層発展させるための必要があるという施策がとられています。

当館は、下部町に残された戦国時代金山の有様を忠実に再現し、関係資料の収集、保管、展示、教育普及活動へと活動を続けている「金山のテーマ館としての特色ある資料館」となっています。

6つの金山遺跡をもち、また、その金山の有様を伝える湯之奥金山資料館は、本町の財産であるとともに、山梨県の、日本の歴史遺産であり、下部町民が全国に自慢できる資産であります。

当館主催の公開講座なども全国の著名な学者が講師を快く担当して下さり、またNHKテレビでは「昼どき日本列島」「ニッポンときめき歴史館」などで全国放送され、民放も当館への取材を積極的に行い、さらに大学における教育の一環である学芸員養成課程における「博物館実習」施設としての学生の受け入れ、資料館友の会活動、友の会会員や一般来

館者の研究サポート等を通じて、「金山の町下部」のイメージが全国に広まっていると考えています。

さて、山梨県では県立総合博物館（県博）構想が進み建設の方向で動き始めました。

私も構想委員の一人として、県博が一館で完結するものでなく、山梨県全域を全県博物館として捉え、その中核館として県博を位置付け、県下各地に残された特色ある自然や歴史遺産をもとに、テーマ別に「歴史映像」を作成し、その映像をインデックス的に来館者が選択し、その歴史映像を見、資料を見、シャトルバスなどでその歴史の現場へと誘導する、その誘導先が県博からハブ的に出ることから「ハブ博物館」構想を提案してきました。

県博で「金山資料」を展示しても専門館の「湯之

奥金山資料館」にはかないません。

ですが、中世戦国時代の金山の姿を全県下的に捉え作成した映像を見た後、その余韻の残る中で下部町の金山遺跡を訪れ、また、金山資料館を見ることによって感動的に理解が深まることとなります。

そういう歴史コースを幾通りも作り、そのコースに自然や地域の産業、道の駅などを取り込むことによって、一つの県博が「あるべき博物館の機能」に加え、全県下的な活性化につながる施設となります。

県博は「富士山の自然」や「武田信玄」など、全国につながるブランドを大テーマに掲げるものと思いますが、その「武田氏の戦国時代」の金山遺跡である「湯之奥金山遺跡」や「湯之奥金山資料館」のもつ役割は一層大きくなっていくものと思います。

有料入館者 5 万人目は松本さん（東京都）

昨年の秋は行楽に最適な日が続き、当館でも例年より人出が多く、ずいぶん賑いを見せましたが、10月10日の体育の日の午後、めでたく有料入館者 5 万人目のお客様をお迎えることができました。

このお客様は、都内板橋区にお住まいの松本博元さん（公務員）で、奥さんと 2 人のお子さんの 4 人で当館に入館されたもので、「山中湖に来たんですが、資料館の情報を聞き足を伸ばしました。こういうことは初めてで驚いています。」と話されました。

松本さんには、5 万人目入館記念証、資料館展示図録、オリジナルテレカ、花束などの記念品が谷口館長から贈呈されました。

有料入館者 4 万人目達成から、丁度半年で 1 万人の方に入館していただいたこととなります。

入館者 1 万人を達成するごとに、館日より皆様にお知らせしていますが、こうして振り返ってみる

と、教育文化施設として、また、体験施設として、5 万人以上の方が足を運んでくれているということ有りを難しく思っています。

これらを向上の励みにしながら、より一層喜んでもらえる施設づくりを目指すとともに、次のステップである 6 万人目の記念入館者を、1 日でも早くお迎えできるよう努力していきます。



友の会の会員は 55 人

1 月 1 日現在の状況は次のとおりです。

会員はいくつかの特典を受益することができますが、多くの方に公開講座の聴講や企画展の観覧のため足を運んでいただいております。

これをきっかけとして、金や鉾山史の研究を始められた方もあり、今号から「私の研究ノート」として、その成果の一端を御紹介することにしました。

◎出身地別会員数

下部町内	28人		
山梨県（下部町を除く）	11人		
神奈川県	6人	静岡県	6人
茨城県	1人	千葉県	1人
長野県	1人	京都府	1人
		合計	55人

活 動 報 告

1 公開講座

平成11年度の公開講座も、10月を皮切りに本年2月まで、5回にわたり開催されます。

本年度は、「鉱山技術史的にみた湯之奥金山」というテーマのもと、4人の講師をお迎えします。

すでに第3回目まで終了していますが、これまでの講座内容についてお知らせします。

第1回目は、昨年の10月23日に開催され、金属鉱山研究会の村上安正会長を講師としてお迎えし、『鉱山技術史的にみた湯之奥金山－初期金山の仕法－』と題しお話ししていただきました。

この講座の中で講師の村上先生は、有史以来の全世界の産金量や日本では宮城県の本宮で最初に採金され、これが奈良の大仏の鍍金に使われたことなどを導入部門として、砂金採取から鉱脈採掘へと採金方法が時代とともに変化したことなどに触れながら、湯之奥／中山金山の鉱石の特徴と黒川金山の鉱石の特徴、そして鉱床の種類や規模から経済的で安全な採鉱法が採られたことなどについて話されました。

第2回目は、11月27日に開催され、新潟県佐渡相川郷土博物館の柳平則子学芸員を講師としてお迎えし、『佐渡相川金山にみる鉱山技術「水揚げ」－民俗的考察－』と題しお話ししていただきました。

露天掘りから始まった湯之奥金山と違い、まず湧水に悩まされた佐渡相川金山だからこそ発達した「水揚げ」という技術について、アルキメデスの原理から考案されたものであることから始まり、その制作方法などをスライドを用いながら分かりやすく説明されました。

そして、汲み上げ式の井戸ですら未知のものになりつつある現代の子供たちに、こういう技術が存在したこと、どのような仕組みなのかということ、どうしたら理解してもらえるかという博物館での取組みについて、学芸員という立場からの裏方としての御苦勞をうかがい知ることができるエピソードを交えてお話しされました。

第3回目は、12月18日に開催され、金属鉱山研究会の村上安正会長を再度講師としてお迎えし、

『古代中国・中世ヨーロッパの鉱山技術－文献考察と視角－』と題しお話ししていただきました。

村上先生は、中国の古代の採鉱とイスラムの採鉱を中心に話され、坑道を掘る場合も余分には掘らず、鉱石が出たら掘ること、作業がしやすいように掘ることなど、坑道の掘り方一つを例にとっても考え方がいろいろあり、それぞれが理にかなっていたことについて話されました。

また、いつの時代も明かりと水が問題で、次第に用具が開発されたことなどについても触れられました。

さらに、18世紀に著わされた「宝の山」という書物には、銅山が約800記録されているが、金山、銀山まで含めると、その数は1,300箇所になるだろうとも話されました。



2 第3回企画展記念講演

第3回企画展は、「湯之奥金山と門西正勝家文書」と題し、9月18日から10月17日にわたり開催しました。

展示内容等については前号でお知らせしましたが、この企画展をご覧いただいたでしょうか。

企画展初日には、山梨県学術文化財課山梨県史編さん室の堀内 亨主任をお迎えし、企画展と同タイトルの記念講演をしていただきました。

今回の企画展は、展示資料が古文書ということで、堀内先生には展示構成でも指導していただき、当館のために随分と時間を割いていただきました。

日ごろ接する機会が少ない古文書という題材のなかで、門西家所有の古文書がどのような位置付けがなされ、また、どんな意味をもつのかという先生のお話しに、聴講された方は真剣に聞き入っていました。



また、今回の講演は、遠隔地にいても講演内容を同時に視聴することができるという「テレビ会議システム」を実験的に導入し、講演の様子は山

梨県富士吉田合同庁舎と結ばれました。

講演会場のスクリーンには、富士吉田会場の様子が常時写し出され、講演後の質疑応答も両会場で行われられました。

今後は、当館の情報が各地に発信できるよう、このシステムを最大限活用したいと思います。

3 湯之奥／中山金山遺跡見学会

昨年の8月8日、3回目を迎えた湯之奥／中山金山遺跡見学会を実施しました。

これは、山梨県立考古博物館及び下部町教育委員会との共催により実施したもので、町内外から30人が参加しました。

坑道、テラス、大名屋敷跡、女郎屋敷跡などを見て歩きましたが、甲斐金山遺跡として国の史跡に指定されている遺跡に立ち、自分の目で確かめることで、その学術的価値を再認識していました。

館からのお知らせ

公開講座等の記録集発行

当館は、開館以来いくつかの教育文化事業を実施してきましたが、特に、それぞれの分野における第一人者をお迎えしての公開講座は、県外からも受講者があるなど、広く浸透しています。

これらの催しは、下部コミュニケーションテレビ局により、VHSテープに収録してありますが、受講者の皆様からの冊子化の要望に応え、今般、講師の皆様方の御承諾と御協力により、平成9年度に実施した竣工記念講演及び6回にわたる公開講座の講演内容をまとめ、記録集として発行することになり準備を進めています。

詳細については次のとおりですが、御入用の向きにあつては、当館までお問い合わせください。

◎書名 金山史研究（第1集）

—平成9年度記念講演と公開講座の記録—

◎体裁 A4版120ページ

◎定価 1,200円

◎発売予定日 平成12年2月15日

◎掲載内容

1 資料館竣工記念講演（講師3名）

湯之奥金山の地質と鉱物

九州大学工学部教授 井澤英二

甲斐の金山と佐渡金・銀山～大久保長安の軌跡～

新潟県立佐渡高校教諭 小菅徹也

湯之奥金山の採金技術

日本鉱業史研究会理事 植田晃一

2 平成9年度公開講座（講師6名）

武田氏と金山①～古文書からみた金山～

信州大学人文学部教授 笹本正治

日本鉱山史上の湯之奥金山

山梨学院大学一般教育部教授 十菱駿武

湯之奥金山と鉱山技術

帝京大学山梨文化財研究所研究部長 萩原三雄
金山衆の暮らしと信仰

富士吉田市教育委員会係長 堀内 真

武田氏と金山②

山梨県教育委員会主任 堀内 亨

今後の金山研究と資料館

湯之奥金山資料館館長 谷口一夫

かつて金山では、金山衆や金掘りと呼ばれた金山関係者による独自の鉱山町が展開し、金鉱の採掘や選鉱などの鉱山作業を中心とした日常生活が繰り返られていました。

湯之奥金山遺跡からの出土品で、「生活用具」と分類されるものには、銭貨、キセルなどの銅製品、碁石、陶磁器類がありますが、これらの意味するところを推し量ると、当時ここに暮らした人々の生活の様子が少しずつ浮かび上がってきます。

例えば、銭貨は少なくとも貨幣を媒体とした物流が行われたこと、換言すれば商人の存在があったことを意味しますし、娯楽や嗜好の品である碁石やキセルは、余暇には囲碁などを楽しんだこと、また、喫煙する人物が存在したことがうかがえるのです。

そして陶磁器類からも遺跡の操業年代の把握をはじめ多くのことを知り得ます。

湯之奥金山の操業年代は戦国16世紀とみられていますが、金山に暮らす人々の生活の様子が、一体どのようなものだったのか、金山経営の実態を考えるうえで、人々のまさに日常生活に密着した陶磁器などに代表される生活用具は、そのことをうかがい知る資料の一つとして重要な位置を占めています。

鎌倉時代は陶磁器において黎明期であり、備前、越前、丹波、信楽、常滑、瀬戸などの生産地が次第に確立され、そして、戦国・近世のころになると一大変革期を迎えますが、いずれの生産地域でも、時代によって生産される陶磁器に特徴があるため、その特徴をつかむことで時代推定が可能になります。

湯之奥金山遺跡から確認された陶磁器片は、残念ながら完形品ではないものの、瀬戸美濃系、肥前系が主で、これらのうち最も多く確認された瀬戸美濃の飲食器は、15世紀末から16世紀にかけて一般の集落でもごく普通に大量使用されたものです。

したがって、この時期の陶磁器が多く確認されたということは、その時期に人が最も多く暮らしたということが予測されます。

このほかには、かわらけ、内耳鍋などの土製品、中国製品、志戸呂、常滑製品が若干ある程度にとどまりますが、これらの中で、特異なものとして目を

引くものに、瀬戸の祖母懐の茶壺、天目茶碗、中国明時代の染付け皿、織部の向付けなどがあります。

特異というのは、つまり、染付け皿などは他の一般的な中世都市や集落でも日常の飲食に際してその数は決して多くなく流通量も少ないものだからです。

また、祖母懐の茶壺や天目茶碗においては、その用途が限定されていることから、当時、茶の湯を行うような階層の存在があったと推定できます。

戦国期の詳細な限定はできませんが、織部の向付けとともに、戦国期から近世の初めにかけての時代に、この山上のテラスのどこかに、そのような階層の生活の場があったことを推定させ、金山経営の具体像を知るうえで興味深い資料といえるものです。



このほかにも近現代の陶磁器も何点か確認されていますが、これが金山経営の下限を示すものなのか、近年持ち込まれたものかは定かではありません。

また、その逆に、古い時期に属する陶磁器が、後世のものに混じって一緒に使用されることはよくみられることで、資料点数が少ない場合は、その陶磁器に示される時期の生活があったかどうかは断定しかねるところでもあり、慎重な判断を要します。

発掘点数も決して多いとはいえないながらも、まとまって確認された陶磁器やその他の遺物資料などから、湯之奥では16世紀前半には金山が開発され経営されていたのではないかと考えられますが、金山衆をはじめ、まだまだ未知な部分を多く残しているのが実状です。

今後の取組みのなかで、遺跡全体の発掘調査が行われる日が来れば新たな遺物の発見があるはずですし、戦国期鉱山の人々の生活の様子を、再度それらの生活用具から見出し、従来の見解を覆すことさえあるかもしれません。(学芸員・小松美鈴)

私の研究ノート①

湯之奥中山金山の 開始時期を巡って

高岡 伸 五
(湯之奥金山資料館友の会会員)

平成9年、開館間もない湯之奥金山資料館を偶然訪れて以来、「金山研究」に強い関心を抱きこれに没頭することとなりました。

当資料館は我が国の「金山研究」の拠点として国指定史跡・湯之奥(中山)金山遺跡の「学際的総合調査」の成果が映像、ジオラマ展示、一般展示などで分かりやすく公開されているばかりか、記念講演、公開講座、企画展(企画展記念講演)などが開催され、我が国を代表する著名な先生方の講義を、また各地の金山関係資料を「生」で見られる機会を提供していただき大変啓発させられるものがありました。

いつの間にか研究の魅力に引きずられ、資料館や図書館通いを始めていましたが、その中で得られた疑問を明らかにしたいというささやかな願いが、この「研究ノート」につながりました。

私が興味をもった研究課題は、①駿河国麓金山及び甲斐国河内領湯之奥中山金山の開始時期のこと、②麓金山及び湯之奥中山金山への穴山氏の係わり、③中山之金山衆十人といわれる「先端技術者十人」のルーツなどで、今回は①の開始時期について考え

てみました。

金山への荷物運搬ルートの保証は、天文20(1551)年に今川義元が太田掃部丞に富士(麓)金山への荷物を通過させるよう命じた文書があり、これにより麓金山における採金が始まっていたことが分かります。

同じ鉱脈をもち、かつ近距離に位置する湯之奥中山金山も同時進行で採金が始まっていたと考えられますし、その両金山への出入りはもっぱら駿河国麓ルートであったものと思われます。

この時期信玄は、信州川中島の戦いを五次にわたり繰り返していましたが、突然方向を一転させ、甲相駿の間で天文23(1554)年に交わした三国同盟を永禄10(1567)年に一方的に破棄したことから、今川氏、北条氏は甲斐国への塩止めを行うなど、駿河からの搬入ルートを閉ざしてしまいました。

この駿河国麓ルートの閉鎖で、永禄11(1568)年に河内領主穴山信君は、河内諸役所に対し中山之郷に出入りする荷物を通過させるよう命じることとなり、この経緯をみるとこの時初めて甲斐国河内領内から中山への物資搬入ルートが開かれたものではないかとみられます。当然、麓金山へのルートもこの間は河内ルートが使われたこととなります。

恐らく、中山と麓金山の金山衆は、同一の技術者集団であった可能性が高いように思われます。

そして、天文20(1551)年には共に採金が始まっていたものとみられます。

年号	1550年	1560年	1570年	1580年	1590年	1600年	1610年
河内領主	穴山信友	穴山信君		穴山勝千代	徳川家臣沼藤藏	豊臣家臣加藤光泰	徳川家康
湯之奥金山支配者	穴山信友?	穴山信君?	穴山信君	穴山勝千代	徳川家康		
富士麓金山支配者	今川義元	今川氏真	穴山信君?	穴山信君	徳川家康	豊臣家臣中村一氏	徳川家康
文献ナンバー	↑ 1 ↑ 2	↑ 3	↑ 4 ↑ 5 ↑ 6 ↑ 7 ↑ 8	↑ 9 ↑ 10 ↑ 11	↑ 12 ↑ 13 ↑ 14 ↑ 15 ↑ 16	↑ 17 ↑ 18	↑ 19 ↑ 20

1. 天文20年(1551) 今川義元、太田掃部丞に富士金山への荷物を通過させるよう命ずる。
2. 天文23年(1554) 甲相駿三国同盟成立する。
3. 永禄3年(1560) 穴山信友死没、穴山信君河内領主になる。
4. 永禄10年(1567) 三国同盟が破れ、武田信玄駿河へ侵攻。
5. 永禄10年(1567) 今川氏、北条氏、甲斐国への塩止めを行なう。
6. 永禄11年(1568) 穴山信君、河内諸役所に対し中山之郷へ出入りする荷物を通過させるよう命ずる。
7. 元亀2年(1571・2・13) 武田信玄、北条氏の出城・深沢城攻撃に参加した中山之金山衆十人に粉子150俵を与える。
8. 元亀2年(1571・10・2) 甲相同盟を復活。
9. 元亀4年(1573・4・12) 武田信玄53歳で病没。
10. 天正2年(1574・1・16) 穴山信君、富士麓郷への棟別諸役を免除。
11. 天正5年(1577) 穴山信君、竹河肥後守に麓金山の掘間など安堵する。
12. 天正8年(1580) 穴山信君、家臣有泉昌輔麓金山の望月弥助掘間を安堵する。
13. 天正10年(1582・3・1) 穴山信君、徳川方に離反する。
14. 天正10年(1582・3・29) 徳川家康、穴山信君に本領(河内領)を安堵する。
15. 天正10年(1582・6・3) 穴山信君、山城国宇治原にて42歳?で死没。
16. 天正11年(1583) 穴山勝千代、中山金山の金山衆の一人河口六左衛門に対し、棟別役、掘間に対する諸役を免除。
17. 天正15年(1587・6・7) 穴山勝千代16歳で病没。穴山家滅亡。
18. 天正15年(1587・6) 徳川氏家臣沼藤藏定政河内領主となる。
19. 天正19年(1592) 豊臣氏家臣加藤光泰甲斐国を支配する。
20. 慶長2年(1600) 徳川家康甲斐国を支配する。

公開講座のお知らせ

鉱山技術史的にみた湯之奥金山

通算回	期 日	演 題	講 師 名
第14回	平成12年 1月22日(土)	兵庫妙見山麓遺跡にみる精錬遺構と技術 ～考古学調査から～	妙見山麓遺跡調査会 調査主任 神 崎 勝
第15回	平成12年 2月19日(土)	奥州と北海道の産金技術	岩手県埋蔵文化財センター 調査第二課長 高橋與右衛門

主 催 甲斐黄金村・湯之奥金山資料館
下部町教育委員会

会 場 湯之奥金山資料館多目的ホール（JR身延線下部温泉駅下車・徒歩約3分）

時 間 午後2時～午後4時

受講料 無料

その他 ◎ 資料館見学及び砂金採り体験希望者には割引券を用意いたします。

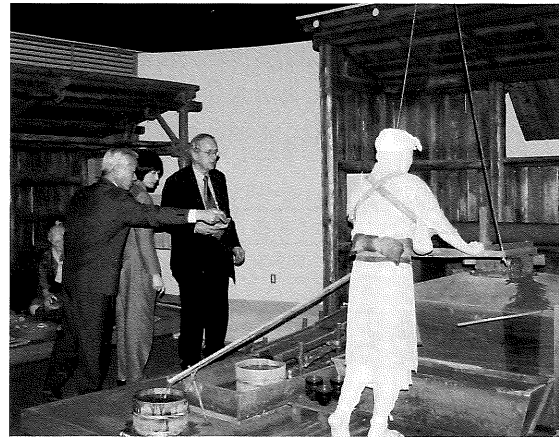
◎ 気象条件や講師の都合等により日程が変更される場合がありますので、その都度資料館へお問い合わせのうえ御来館ください。

フランスのシャルネイ・レ・マコン市長来館

暮れも押しつまった12月13日、下部町国際交流協会（松井美次会長）の招きで、フランスのシャルネイ・レ・マコン市のジェラルド・ボアザン市長が来町され、当館を視察されました。

職員の案内で館内を見学しましたが、さすが学術文化の国の市長だけあって、当館の教育文化事業や展示物について熱心に質問されていました。

また、砂金採りも体験され興味を示されましたが、予定の時間を迎え、後ろ髪をひかれる様子で当館を後にされました。



編 集 後 記

いよいよ平成12年が始まりました。

今年は景気が上向き、人の流れが大きくなることを祈らずにはられません。

昨年エントランスホールには、数えきれないほどの花卉をつけた見事な菊の大輪が飾られ、入館者

と職員の日を楽しませてくれました。

これは、常業の依田良平さんが丹精込めて育てられたもので、依田さんには開館以来3年続けて寄贈していただいています。

皆様からお寄せいただいた温かい心をよりどころとしながら、今年が飛躍の年になるよう職員一同心新たに頑張りますのでバックアップをお願いします。

資料館だより

第11号
平成12年 1月12日

発行 甲斐黄金村・湯之奥金山資料館
山梨県西八代郡下部町上之平1787番地先
TEL 0556 (36) 0015